

2月10日  
第1回 一般入試

2025年度  
入学試験問題

国語

【注意事項】

- 試験時間は50分です。
- 問題は1ページから19ページまであります。
- 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 問題用紙と解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。
- 記述は句読点や記号も字数に数えます。

受験 番号						氏名	
----------	--	--	--	--	--	----	--

順天堂大学系属理数インター高等学校

一

次の各文の傍線部のカタカナの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- ① 霧が深くリンカクがぼやけて見える。
- ② ピアノのセンリツに合わせて歌う。
- ③ 日に焼けて肌がカッショクに染まる。
- ④ 熟練の刑事は事件現場にオモムク。
- ⑤ 習いたてのツタナイ英語で話す。

二

次の各文の傍線部に当たる漢字の読みがなをひらがなで書け。

- ① 財務省に諮問機関が設置された。
- ② 子どもたちが粘土で塑像を作る。
- ③ 決勝戦は二対一で惜敗した。
- ④ たった一つのミスで窮地に陥る。
- ⑤ 仲間を顧みる余裕はなかった。

三 次の記事を読み、あとの問いに答えよ。

\*1はぶしほる 羽生善治さんは著書『大局観』の中で、創造性について、膨大な数の 棋譜を覚えながら、「必要でないときには大胆に捨てるが、必要になった時に拾い上げ、それをもとに新たな創造をする」「情報や知識はしばしば創造に **A** する。情報や知識が先入観や思い込みを作ってしまう、アイデアが浮かばなくなってしまう」という趣旨のことを書いている。棋譜の勉強がいらなそうと言っているわけではない。膨大な数の棋譜を勉強し、頭に叩き込みながらも、それによって思い込みをつくらないように意識している、ということだろう。

いま持っている知識は新しい知識を創るベースとなるとともに、**\*3くびき** 軛ともなる。そもそも **①** 熟達という過程は対立する二つの方向性に折り合いをつけなければならない過程にほかならないのだ。熟達するにつれて、知識は大きなシステムとなり、安定し、いろいろと考えずに自動的に身体が動くようになる。それはものごとを正確にぶれなく行うためにとても大事なことだ。しかし一方で、それは慣れとなり創造性の足を引っ張る。一流の熟達者が創造的であるのは、彼らが「思い込み」にはまらないように、常に **B** 的に思い込みを破ろうとしているからだ。

誤った思い込み知識は、科学概念の学習と発見にとって **C** 的になりうる。一般的に科学の大発見は多くの場合、いままでの理論では予想されなかったデータが得られたときに起こる。実験をして、いままでの理論では説明できない予想外の結果が得られたときに科学者のとる態度には二つある。理論が誤りだと考え、新たな理論を考えるか、あるいは実験のしかた、または分析のどこかに誤りがあったと考えるか。

科学の研究はまったく仮説のないところから始めることはありえない。何の理論もなく、予想もなければ、何を観測したらよいか、観測されるデータのどこを見ればよいか、何を実験すればよいか、どのような実験を計画したらよいかを決めることができないからである。自分の仮説を持って研究をするということは、その仮説が正しいことを示すのにバイアスがかかるということだ。**\*4** エスタブリッシュされた科学者でさえ、この **②** バイアスに打ち克つのは非常に困難で、多くの場合は、予想と違う観測値は無視したり、実験の手続き上の間違いだと思ってしまうりする。その中で、予期せぬデータに直面したときに、自分の仮説に縛られず、データを説明できるあらゆる可能性を考えて、最終的にそのデータを説明する別の理論を考え出すことができた人が、偉大な発見によって **③** 科学史上に名前を残した人たちである。

例えば、惑星の軌道が円ではなく楕円であることを発見したヨハネス・ケプラーは、まだ天動説が強く信じられていた時代に惑星の運動の仕組みを明らかにしようとしていた。当時、コペルニクスが地動説を唱えていたとはいえ、まだそれを受け入れる研究者は少なかった。コペルニクスでさえ、惑星は太陽を中心に円軌道を描いて運動していると信じていて、楕円の軌道で惑星が運動するとはまったく誰も考えていなかった。

ケプラーと同時代に、ティコ・ブラーエという当時最も有力だった天文学者がいた。ブラーエは当時では最も正確で膨大な観測データを持っていたが、地動説が正しければ観測されるはずの年周視差（地球の公転運動のために地球の位置が変わると、地球との距離がより近い恒星は遠い恒星に対して位置が変わって見える現象のこと）が観測されなかった。このことから、ブラーエ自身はコペルニクスの地動説を否定し、天動説が正しいと結論

づけていた。

ブラーエが記録した膨大なデータを彼の弟子であったケプラーが手に入れ、火星の軌道の計算をしていた。ケプラーは、一五八〇年から一六〇〇年の二〇年間に、火星が地球に最も接近する時（衝しゅうの時）の一〇回の観測データに注目した。すると、真円軌道と仮定して計算すると、ブラーエのデータとどうしても合わない。理論値と観測値の差は〇・二三度であった。普通の天文学者なら、これは間違いなく「誤差」と結論づけただろう。しかし、ケプラーはこのわずかなズレを、ブラーエの観測精度から考えて、ありえない数字であると **D** した。当時、コンピュータがなかった時代に、数字のズレが計算ミスによるものではないことを確かめるため、三年あまりにわたってこつこつ検算をつづけ、やはり、惑星が真円軌道で運動することはないという結論に達した。その後、卵型の軌道など、円軌道以外の様々な可能性も試し、やはり観測値と計算値が合わなかった。最後にたどりついたのが楕円軌道だったのだという。データを集めた本人のブラーエは天動説を信じていたため、この理論値と観測値の差を誤差とみなしてそれ以上進むことができなかったのである。

ただし、思い込みなしで何かを学習することは、ほぼ不可能であるということ再度強調しておきたい。人は何がしかの「あたり」（直観）がなければ、何かを学習することは非常に難しい。科学も同じである。その「あたり」（つまり「仮説」）は、まだ「思い込み」の段階のものだと言ってもよい。思い込み（仮説）は正しい場合も正しくない場合も、もちろんある。何かを学習し、習熟していく過程で大事なことは、誤った <sup>\*5</sup> スキーマをつくらないことではなく、<sup>④</sup> 誤った知識を修正し、それとともにスキーマを修正していくことなのである。

ちよつと脱線するが、セレンディピティということがある。もともとは「セレンディップの三人の王子」という童話で、賢い王子が予期しないことに遭遇したときに、そこからいつも、幸運をもたらす発見をするところから、ホレス・ウォルポールというイギリスの小説家が造ったことばだそうである。考えてみれば、<sup>\*6</sup> シャーロック・ホームズがしている推理もセレンディピティと言えるだろう。

科学ではこれが世紀の発見をもたらすカギだと言われている。自分の予想と違う現象をみたときに、それを見過こさず、いかにそこから別の可能性を見いだすことができるかだ。ノーベル賞の創始者のアルフレッド・ノーベルのダイナマイトの発見もそうだった。X線の発見も、ペニシリンの発見も、セレンディピティなしに生まれなかった。ケプラーがティコ・ブラーエの観測データと理論値のズレがおかしいと気づいたのも、<sup>⑤</sup> まさにセレンディピティである。

いずれにせよ、逸話から浮かび上がるケプラー像は、超一流の熟達者の特徴にぴたりと当てはまる。長年の努力と研鑽けんさんの結果である広く深い知識、そこから生まれる直観、その分野で広く信じられていた常識にも、自分の直観にも支配されない思考の柔軟性。そして直観を修正し、データに基づいて論理を積み重ねて熟慮する批判的思考力。何年にもわたってこつこつと続ける粘り強さ。そのすべてを満たすことが、科学にも、その他の分野でも、創造的であるために必要不可欠なのだ。

「天才」と呼ばれる一流人に共通しているのは向上への意欲だけではない。自分の状態を的確に分析し、それに従って自分の問題点を見つけ、その

克服のためによりよい練習方法を自分で考える能力と自己管理能力が非常にすぐれているのである。若くして卓越した熟達者になる、いわゆる「天才」と呼ばれる人たちは非常に早期からこの能力を身につけている。

⑥ 目標設定が大事ということは誰でもわかる。ただし、目標を的確に設定することは簡単にできることではない。羽生善治さんは著書『大局観』で目標について、「あるときには、目標を作ること、義務感が強くなってしまうことがある。またあるときには、本来もつと多くのこと、難しいこともできるのに、目標が設定されたことよって限定されたところに安住してしまうこともある。しかし、目標はクリアできなかったものの、そのプロセスで多くのことを学んで気が付いたら実力をあげていたということもある」という趣旨のことを書いている。目標設定がうまく的確にできなければかえって自分の<sup>\*7</sup>ポテンシャルを生かし切ることができず、目標達成ができずにストレスを感じるだけで終わってしまうこともよくあることだ。

どういう自分になりたいか、そのためにどういう訓練をすればよいかということの具体的なイメージなしに、「東大に入る」「金メダルを取る」「社長になる」という結果の願望を持つだけでは熟達者になれない。<sup>\*8</sup>イチロー選手は「プロ野球選手になる」という目標を小学生の時から持っていたが、その目標は単にその地位を獲得して華やかな場に身を置き高収入を得たいためではなかったはずだ。プロ選手がどのようなパフォーマンスをするかという明確なイメージを持ち、そのイメージを実現するのが目標だったのである。バッティングセンターで可能なかぎり最も速いスピードを設定して、らい、バッターボックスの外に出てプロの投手の投げる球を体感していたのはそのためだ。

一流になる人々は、どういうことができるようになるのか、一流のパフォーマンスは何なのかを具体的にイメージできる。つまり、自分の中で理想とするパフォーマンスが心の眼で「見える」。そして、そこに向かって自分が何をすべきなのかを考えることができる人々なのである。さらにそれを突き詰めると、的確な目標を持つということは、

- ・その分野の超一流の人のパフォーマンスがどのようなものを理解できる。
- ・いまの自分がどのくらいのレベルにあつて、超一流の人たちとどのくらい隔たりがあるかわかる。
- ・その隔たりを埋めるために何をしたらよいか具体的なイメージできる。

ということだ。自分が超一流になり、自分よりも上の人がほとんどいなくなつても、自分の中で、いまよりもつと上にいる自分、目指すべきパフォーマンスがイメージできる。自分が（そして他の人も）まだ到達していない地点が見え、そこに至る道筋が見える。それが<sup>⑦</sup>超一流の熟達者と一流の熟達者の違いである。ここでいう「目指すべきパフォーマンス」や「そこに到達するための具体的な道筋や方策」が見えるようになるというのは、その分野の学習での多大な経験と深い知識が要求されることだ。

（今井むつみ『学びとは何か』一部改変）

(注)

- \* 1 羽生善治……棋士(将棋指し)の名前。
- \* 2 棋譜……将棋の対局手順を示した記録。
- \* 3 軛……自由な思考や行動を束縛するもの。
- \* 4 エスタブリッシュされた科学者……実績のある科学者。
- \* 5 スキーマ……知識の枠組み。
- \* 6 シャーロック・ホームズ……イギリスの作家コナン・ドイルの推理小説に登場する探偵で、いかなる難事件も解決する人物。
- \* 7 ポテンシャル……潜在能力。
- \* 8 イチロー選手……日米のプロ野球で活躍した選手の名前。

問一 空欄 A ~ D に入る語として最も適当なものを次からそれぞれ選び、記号で答えよ。

- ア 致命
- イ 意識
- ウ 直観
- エ 想像
- オ 干渉
- カ 絶対

問二 傍線部①「熟達という過程は対立する二つの方向性に折り合いをつけなければならない過程にほかならない」とあるが、そう言えるのはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 豊富な情報や知識があればいろいろ考えずに済んで作業能率は上がるが、予想外の結果を受け入れる創造性を損なってしまうから。
- イ 膨大な数の棋譜を頭に入れると確かに将棋には熟達するが、さまざまなことがらに役立つような応用力は失われてしまうから。
- ウ 熟達するにつれ知識の大きなシステムが作られ創造性も高まるのだが、安定性や正確性が失われて間違いを犯すようになるから。
- エ 情報や知識が増えれば増えるほど自動的に身体を動かせるようになるが、それで慣れてしまえば新しい知識は生まれなくなるから。

問三 傍線部②「バイアスに打ち克つ」とあるが、「バイアス」のここでの意味を表す語を、本文中から三字で抜き出して答えよ。

問四 傍線部③「科学史上に名前を残した人たち」とあるが、三人の天文学者に関する説明として適当なものを次から二つ選び、それぞれ記号で答えよ。

- ア ブラーエは、コペルニクスの天動説が正しければ観測される年周視差が観測されなかったことから、地動説が正しいと結論づけた。
- イ ブラーエは、観測精度の高い膨大なデータを記録していたが、天動説を信じていたため、理論値と観測値との差を誤差とみなした。
- ウ ケプラーは、ブラーエが記録したデータのわずかなズレから「あたり」をつけた上で、様々な検証を経て楕円軌道の結論に達した。
- エ ケプラーは、理論値とブラーエの観測値との差を誤差とみなさず、丹念な検算によってブラーエのデータの正しさを結論づけた。
- オ コペルニクスは、惑星が太陽を中心に円運動していることを信じて地動説を唱えたが、それを支持する学者はほとんどいなかった。
- カ コペルニクスは、惑星の楕円軌道を発見することはできなかったが、彼を受け継いだブラーエやケプラーが楕円軌道を立証した。

問五 傍線部④「誤った知識を修正し、それとともにスキーマを修正していくこと」とあるが、このこと具体例として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 多くの子どもは地球が平らだと信じているが、大人から「地球は丸い」という話を聞くと、それを事実として認めるようになる。
- イ 多くの子どもは天動説を信じているが、理科の授業で地動説を習うと、地球の自転によって昼と夜ができると推測するようになる。
- ウ 多くの子どもは単語の意味を自分で知っていくのだが、大きくなって外国語を学ぶと、辞書を引いて単語の意味を知るようになる。
- エ 多くの子どもは「リンゴ」や「バナナ」の名前をまだ知らなくても、それらを実際に見れば、「果物」だと認識できるようになる。

問六 傍線部⑤「まさにセレンディピティである」とあるが、「セレンディピティ」とはここではどういうことか。本文中の語句を用いて四十字以内で説明せよ。

問七 傍線部⑥「目標設定が大事ということは誰でもわかる」とあるが、羽生善治氏が目標設定について述べたものとしてふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 目標を設定することにより、その目標を超えるところまで力を出し切らずに満足する場合がある。
- イ 目標を設定することにより、目標は必ず達成しなければならないという考えが生じる場合がある。
- ウ 目標を設定することにより、達成しようとする過程で知らぬ間に実力が身に付いている場合がある。
- エ 目標を設定することにより、達成に向けての意欲が生まれ、より高い目標を見いだす場合がある。

問八 傍線部⑦「超一流の熟達者と一流の熟達者の違い」とあるが、どういうことか。八十字以内で説明せよ。

問題四は次のページから始まります。

#### 四

次の文章は、明治期の女流作家、樋口一葉を題材にした小説の一部である。これを読み、あとの問いに答えよ。

作家としての名声が世に出始めた一葉（「夏子」）のもとに、連日のように作家仲間や出版関係者が訪れ、同居している母の「たき」と妹の「邦子」は気苦労が絶えない。しかし、一家を支えてくれている夏子のことを思い、我慢を続けている。そんな中、夏子が病に倒れ、次第に深刻な病状になっていた。

邦子は先ほど洗い清めたばかりの家の戸に指をかけた。

夏の陽をさんさんと浴びていたせい、ほの暗い家の中に目が慣れない。

珍しく軽いめまいがした。上がりがまちにしばらく腰かけ、邦子は両手の指で額を支えた。

「大丈夫かい、邦子」

① 邦子がかぶりを振った。

（わたしだって、不死身じゃない。かあ様だって……）

それでも **A** はようよう動いて、小さくこんなふうに言っているのだった。

「大丈夫」

目をつぶっていると、ここがどこかわからなくなる。\*1 菊坂の家。\*2 浅草竜泉寺。いや、もちろんここは \*3 丸山町 なのだった。

水の上の家らしく、ひんやりした空気に古畳の匂いがする。

たきが傍らに座って邦子の肩を抱き寄せた。

「かあ様こそ、ずいぶんとお疲れでしょう」

「わたしはいいの。わたしはね」

たきの **B** のあたりが地蔵のように柔和になる。太くて丸い指先が、邦子の鬢びんの解ほれを直しにきて、すべらかな頬ほにかかる。

「夏子は私の娘だからね」

邦子は母親の肩に頭を乗せてしばらくじっとしていた。

「おまえには悪いことをしているね」

② 邦子が小さくかぶりを振る。

やがてたきはひっそりと、けして激することなく、言い捨てた。

「樋口一葉だかなんだか知らないけど、あれはいったい何様のつもりだろう」

邦子はああ、と気の遠くなる思いがした。その言葉は、いつか母の口から出ると思っていた。

「わたしたち家族をさんざん振り回して」

たきの言葉は邦子の **C** に、痛いようにしみわたる。

「うちへ入り込んでくるやつばらも憎い。物書きだったら、なんでも許されると思ってた」

邦子も正直に言えば、樋口一葉をどこかで放り出したくなる日があった。

たきも邦子も日頃は自分たちを抑え、いかにも愛想よく振る舞っている。私生活に踏み込まれながら、客商売の家のように、気を使って暮らしていた。

もうそろそろ生活の軌道修正をしなくては、姉ばかりでなくこちらの身も持たない。余計な煩<sup>わづら</sup>いが多すぎた。母娘の三人の静かな暮らしぶりへ、時間を戻したかった。

「あれはもう、夏子じゃありませんよ」

たきはそう吐き出して、咽<sup>むせ</sup>び泣くのだった。

③ 樋口一葉に殉じるように暮らしながら、いつしか樋口一葉を憎んでいた。

④ 「一葉は夏子じゃない」

ほかにもう言いようがないのだ。夏子が悪くないことは、たきと邦子が一番よく知っていた。

邦子の **D** が、折々の夏子の表情を思い浮かべて熱くなる。それはたきとて同じ。母親であれば尚更のことである。

夏子の哀れと偉さが、ふたりの心を引き裂くのだった。

「でもね、もうすぐだよ。もうすぐ終るから」

邦子は母の肩からはつと頭を上げた。 **A**

おそろおそろ母親の顔を覗<sup>のぞ</sup>こうとして、たきの指に止められた。

「わたしにはわかるんだよ。もうじきお迎えがくるよ」

「ああ、かあ様……」

たきが低い声でしーつと言ひ、歌うように、なだめるように、繰り返した。しーつ。いいのよ。いいの。大丈夫だよ。

邦子はたきが今どんな目をしているのだろうと思う。胸の中の、背中に近いあたりが急激に冷たくなっていった。自分の目はぎゅつとつぶっている。

(もうすぐ)

それは邦子も感じていた。<sup>⑤</sup>解放と自由と、取り返しのない悲嘆とが、手を携えてやってくるだろう。ちようど四年前、今日のように、一点の雲もなく晴れた日だった。【イ】

焼けるような陽の下、砂埃の舞う大通りを、夏子二十歳の後ろ姿がゆらゆらと陽炎かげろうの中に揺れて遠ざかる。師の\*4 桃水とうすいに提出する習作のため、徹夜をした翌日である。

(あのころは美しかった。貧しささえ、美しかった。一生懸命さがすり切れていなかった。母娘三人が、こころの肌理を荒らさず暮らしていた) 早朝来たのは授業を休むという断りの手紙で、桃水の腹痛のためだった。

桃水を見舞って帰宅後、さらに夏子は上野の図書館へ行くと出ていった。一睡もしていない夏子をたきは心配し、日暮れまで帰ってこない夏子を家の外に出て待っていた。【ウ】

(わたしは今日のように洗濯して、\*5 夕餉ゆげになっちゃんの好きなものをこしらえて、お湯を沸かして……)

母子は和気あいあいと食卓を囲み、夏子はその日あったことを嬉しそうに報告した。その日の夏子のおしゃべりを、邦子は今も忘れない。

図書館へは、東京大学を抜けてから、\*6 池之端いけのはたを通して行ってみたの。池に近づくと、清らかな蓮はすの香りが漂ってきて、それはすがすがしかった。広々とした池を見渡せば、紅や白の蓮が水面の見えないくらいに咲き満ちていたわ。岸辺の柳をなびかせながら涼しい風が吹いてくると、蓮の葉裏があちこちで白く翻る。あそこは別世界だったわ。今度、みんなで一緒に見に行きましょう。そうだ、朝早くがいい。ぼーんっていう、花の開く音を聞きに。

思い出せば思い出すほど、悲しいくらいに美しい。夏子から聞いた話を、邦子はみんな憶おぼえている。活き活きしていて、一度聞いたら忘れられない。

## 【エ】

\*7 蝸ひぐらしの声が高くなり、入相いりあひの鐘が鳴るのに驚かされるまで、図書館でひとり一心に読書をしている夏子。

鳥のねぐらに帰ると競うように道を急ぐ夏子を、明日天気になあれと子供の歌う声が追っていく。

目にも口にも入る汗をハンカチで拭き拭き帰る道すがら、夕涼みする大人や子供のありさまに目を留め、新芋の赤いのを八百屋で買ってみやげにしているような夏子。

人目が煩わしくて日傘はさしたままなのに、それでも若い書生らに声をかけられたと憤慨する口ぶり。

お腹空いたわ。まあおいしい。気持ちがいいわ。ありがとう。夏子に、あの涼しやかな顔でそんなふう感謝されると、邦子はどれだけ嬉しかったかしかない。夏子は、たきと邦子の夢だった。【オ】

夏子はたちの、夢にあふれた初々ういづいしい姿が、邦子の目に焼きついている。

いつかこの夢を、この美しさを、自分は乗り越えていかなくはならないと思う。

(注)

- \* 1 菊坂……現在の東京都文京区本郷にある地名。
- \* 2 浅草竜泉寺……現在の東京都台東区竜泉付近の地名。
- \* 3 丸山町……現在の東京都文京区西方にある地名。
- \* 4 桃水……半井桃水。樋口一葉の師。
- \* 5 夕餉……夕ご飯。
- \* 6 池之端……東京都台東区にある地名。
- \* 7 入相の鐘……夕暮れに寺でつく鐘。

問一 本文からは次の一文が脱落している。【ア】～【オ】のどこに入れるのが適当か。記号で答えよ。

自分もその場にいたような気がするのだった。

問二 傍線部①「邦子がかぶりを振った」、②「邦子が小さくかぶりを振る」とあるが、邦子の同じようなこれらの動作からはそれぞれどのような様子が読み取れるか。最も適当なものを次からそれぞれ選び、記号で答えよ。

- ア 夏子のせいで疲労がピークに達しており、自分がもう限界であるということを母親にアピールしようとしている。
- イ 夏子のことを謝る母親の言葉を受け、ただでさえ夏子のことと煩わされている母にこれ以上負担をかけまいとしている。
- ウ 自分だけでなく母親にまで迷惑と心労をかけているにも関わらず、平然としている夏子に対して恨みを募らせている。
- エ 自分の疲れた様子を見て心配をしてくれる母親の言葉に、思わず自分の辛い思いを動作にして表してしまっている。
- オ 自分は夏子のごとで母親が案じるほど苦勞はしておらず、自分を氣遣う母に対してその必要はないと訴えている。

問三 本文中の空欄 A には体の一部を表す語が入る。最も適当な語を次からそれぞれ選び、記号で答えよ。

- ア 目
- イ はらわた
- ウ 胸
- エ 頭
- オ 唇
- カ 手

問四 傍線部③「樋口一葉に殉じるように暮らしながら、いつしか樋口一葉を憎んでいた」とはどういうことか。七十字以内で説明せよ。

問五 傍線部④「一葉は夏子じゃない」とあるが、ここから「たき」のどのような心情が読み取れるか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 樋口一葉として売れ始めている夏子は、昔とは比べることができないほど性格が変わってしまい、そのことをたきは無念に思っている。
- イ 他人が家に入る煩わしさから親子三人の静かな暮らしが失われているもの、やはりたきは自分の娘である夏子のことを愛しく思っている。
- ウ 夏子は樋口一葉という作家の立場になると人が変わったように傲慢になってしまったため、夏子自身は全く悪くないとたきは考えている。
- エ 樋口一葉という名前が独り歩きしてしまい、夏子自身もその名前についていけなくなっているのではないかとたきは心配している。

問六 傍線部⑤「解放と自由と、取り返しをつかない悲嘆とが、手を携えてやってくるだろう」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 夏子の死によってたきと邦子は夏子のわがままから解放されるが、それは一家の大黒柱を失い貧しい生活に戻ることを意味するということ。
- イ 夏子の死によって家族や作家仲間が夏子の傍若無人な振る舞いから自由になるが、それは一葉という希代きだいの作家の喪失に繋がるとのこと。
- ウ 夏子の死によってたきと邦子は様々なしがらみから解放されるが、それは夏子の命と引き換えにしか実現しない悲しい出来事だということ。
- エ 夏子の死によって夏子自身は余計な気苦労をしなくて済むようになるが、それは家族が一人失われてしまうことと同じ意味を持つということ。

問題 五 は次のページから始まります。

## 五

次の文章を読み、あとの問いに答えよ。

和歌といえは、誰の目にもいちばん親しいものは、『百人一首』であろうか。

そこで、この『百人一首』のなから、いくつかの歌を例として、和歌を読む秘儀を伝授したいと思う。

いま、なにげなく「和歌を読む」と書いたが、この「よむ」という動詞は、ほんらい「声に出して唱える」というほどの意味であった。昔の日本人の習慣には黙読というやりかたはふつう意識になく、「よむ」といったら必ず声に出して読んだのである。そういう古い日本語の名残は、たとえば「お経を読む」というような言い方のなかにかすかに残っている。または「サバを読む」などという言い方も、魚売りが、早口に数えあげるなかで適当に数をごまかすことを言うのであって、そこには「声」がなくてはならぬ。

だから、和歌を作ることを「和歌をよむ」といって、この場合は「詠む」という漢字を宛てているけれど、それも朗々と詠唱するスタイルが、この「よむ」ということばのなかに含意されているためである。

思い出してみれば、私どもが子供であった時代までは、百人一首といえは、これはもうお正月の「かるた取り」の道具であった。私どもは、なにも古典文学の勉強として百人一首の和歌を読んだのではない。いわば楽しい遊びのメディアとして、意味などにも考えずに、ただこれを暗記してカルタ取りに備えたのであった。

X

そこで、声に出して朗誦することと、目だけで黙読することとの、いちばんの違いはなんだろうか。

それは、<sup>①</sup>「時間」の違いだ、と端的には言うことができようか。

一つ例をあげる。

I 浅茅生あさぢふの小野の篠原しのぶれど あまりてなどか人の恋しき

参議等さんぎひとし

『百人一首』の名高い歌であるが、もともとは「<sup>\*1</sup>後撰和歌集」巻第九、恋一に出ている歌である。作者は「<sup>\*2</sup>参議源等朝臣」という人だが、歌人としてはそれほど著名ではない。

さて、これを黙読すると、ほんの二、三秒で読めてしまう。

これにいま、受験参考書式の「解釈」を加えてみるとすると、「浅茅生の小野の篠原」までは、その次の「忍ぶれど」を導くための序詞という部分で、いわば飾りのようなものにすぎず、歌の本旨は、「忍ぶれどあまりてなどか人の恋しき」というところにある。つまり「人に知られないようにじつ

と我慢して恋いわたつているのだけれど、いまはもう忍ぶことができなくなるほど、どうしてあの人がかんなんにも恋しいのだろう」という意味だ、と説明するであろう。では、その<sup>②</sup>どこが『百人一首』に選ばれるほど良かったのであるか、となると、この説明では首を傾げざるを得ない。

ところが、これを、先に示した八拍子に引き当てて、君が代と同じように歌ってみるとどうだろうか。いまふつうに朗々と『君が代』を歌って時間を計測してみると、ちょうど一分ほど、<sup>\*3</sup> 雅楽の人たちによるゆったりとしたテンポの演奏の動画で、一分二十秒ほどで歌い終わるといふ結果が得られた。つまり、黙読で読んでしまえば二、三秒の和歌を、一分ないし一分半ほどの長い時間をかけてゆったりと歌う、というのが声に出して朗誦するという行為であることがわかる。

こうしたゆるゆるとした音読または詠唱を前提として考えると、この歌がどのように、それを「聞いている人」に伝わっていくかが想像される。つまりそれは、<sup>③</sup>こういうことである。

まず「あさじうの〜〜おのの〜〜」というところを十秒くらいかけてゆつくりと歌ってみる。するとその十秒のあいだ、この歌の聴き手の脳裏には、「浅く雑草の生えた、人里離れた野の景色」が思い浮かぶことだろう。「浅茅生」は、昔の歌語で、背丈の低い雑草の生えているところというほどの意味である。また「小野」というのは、「野」ということばにちよつとした飾りを付けた表現だ。そうして、「野」というのは、里と山のあいだにある、里でも山でもない空間をさすことばであった。

この場合、「里」というのは人間の住む通俗な生活空間であるが、「山」は本来神のすむ聖域で、同時に鬼や天狗のようなものも潜んでいる恐ろしい場所でもあった。そうして、その中間にあるのが「野」で、野には、山から神や鬼も降りてくるし、里から人が入っていくこともできる。だから本質的に「浅茅生の小野」には<sup>④</sup>人気がないのである。

だから、ここまでのところで想像されるのは、まさにその浅い草の生えた人里離れた野の寂しい風景である。京都の人だったら、<sup>\*4</sup> 嵯峨野、鳥辺野、化野、大原野、などというところを思い浮かべられるだろう。つづいて「しのはら〜〜」と歌われるときには、その野に篠竹が生えていて、おそらく風にササササと鳴るところなどが想像されるかもしれぬ。そのイメージによって、さらに寂しい風情が強調されるのである。

こうしてゆつくりとした時間の経過のなかで、その一語一語の寂しさを味わいながら「しのはれど」という肝心のことばが出てくるのだから、その忍ぶ恋をしている人の思いが、どれほど寂しく苦しく孤独なものが、ひとつの具体的イメージとともに伝わってくる。つまり、「しのはら」までは序詞だからあまり意味がないなどと考えるはいけない。そして「しのはらしのぶれど」と「し」の音が重なって、忍びやかな思いはその音の重なりによって強調される、これも音声で聞くとよくわかる技巧であろう。

と、ここまで来たときに、<sup>\*5</sup> 定家の時代の人だったら、すぐ思い浮かぶことがある。じつはこの歌は「<sup>\*6</sup> 本歌取り」という技巧が使われていて、

## Ⅱ 浅茅生の小野の篠原しのぶとも 人知るらめやいふ人なしに

(浅く草の生えている野の、その篠笹の原ではないが、俺がこっそりと恋しているからとて、そのことをあの人は知ってくれるだろうか、誰もそのことを伝えてくれる人もないのではなあ……)

という、『古今和歌集』(巻第十一、恋歌一)に収められている恋の歌が<sup>④</sup>下敷きになっているのである。そこで、「あさじうの、おののしのはら、しのぶ」まで聞いた人は、その先が「しのぶとも(こっそりと恋しているからとて)」と行くかと思っていると、そうではなくて「しのぶれど(ぐつと我慢して秘めているけれど)」というふう<sup>④</sup>に展開していく。そうして、心のなかで我慢してもしても、私の恋しい思いはいつのまにか我慢しきれないほどにつのつていく、どうしてこんなにも恋しいのだろうか、と自問自答する形で、一首を締めくくるのである。この「ひとの恋しき」に行き着くまで、寂しい野の情景から始まって、苦しくも忍んできた恋心の来し方を思い、最後に、「もう心のうちに秘めておけないほどに俺は恋しくなってしまうぞ、あの人に対する恋しさが」という恋の表白に至るために、ぐつと心に沁みるという寸法なのである。

こうして、朗々と歌い上げられるあいだに、聞き手の心のなかには、つぎつぎと走馬灯のように、寂しく孤独な情景、風物、情調が交錯し、それらのしんみりと寂しいセンチメントを十分に味わったところで、「ああ、どうしてこんなにも恋しいのだろうか」と言うからこそ、その孤独な空気感によって増幅された恋しさが生きてくるというものである。

本歌取りの技巧を用いて、ほとんど元の歌と同じことばを連ねながら、最後にきて、本歌よりももっとずっと切実な思いを詠じてみせたところが、この歌の味わいで、それゆえにわざわざ『百人一首』に選ばれたものでもあろう。

(林望『リンボウ先生のなるほど古典はおもしろい!』 一部改変)

(注) \*1 後撰和歌集……平安時代の勅撰和歌集。

\*2 参議源等朝臣……平安時代中期の歌人。

\*3 雅楽……奈良・平安時代から宮中で演奏された音楽。

\*4 嵯峨野、鳥辺野、化野、大原野……京都の地名。

\*5 定家……鎌倉前期の歌人。歌学者。

\*6 本歌取り……和歌・連歌などで、意識的に先人の作の用語・語句などを取り入れて作ること。

問一 本文中の空欄 X には次のア～オの文が入る。正しい順序に並べ替えよ。

ア 私たちは、二手に分かれて、各歌の「下の句」だけが文字で書かれている「取り札」を睨<sup>にら</sup>んで、我先にとこれを取って遊ぶのであった。  
イ 思えば、楽しい遊びであった。

ウ そのうちに、歌の朗詠の節回しなども、おのずから覚えてしまつて、和歌といえ、そういう調子で朗々と読み上げるものだという感覚が血肉の間に染み入ってきたのである。

エ お正月の団欒<sup>だんらん</sup>のひとつとき、一座の長老のような人が、「読み札」（これには歌人の絵が描いてあつて、その余白に和歌が書き入れてある）の和歌を、独特の節回しで、朗々と読み上げる。

オ そうして、この遊びのなかで、私どもは自然自然と、古典的な名歌を心の底にきつちりと記銘するところとなつたのである。

問二 傍線部①『時間』の違いだ」とあるが、声に出して朗唱することでのどのような効果があると考えられるか。四十字以内で説明せよ。

問三 傍線部②「そのどこが『百人一首』に選ばれるほど良かったのであるか」とあるが、その理由を端的に説明した一文を本文に求め、最初の五字を抜き出して答えよ。

問四 傍線部③「こういうことである」とあるが、その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 「あさじうのおのの」で、人と神聖なものの住む境界を示し、恋心を抱く相手と自分には物理的にも精神的にも距離があるため「しのぶ」思いを伝えることが出来ないことの嘆きを表現している。

イ 「あさじうのおのの」で、人里離れた寂しい野の情景を想像させることで詠み手の孤独な気持ちを表し、「しのはらしのぶれど」で、明かすことのない出来ない読み手の恋心の苦しさを強調している。

ウ 「おののしのはら」で、野に吹く風を自分の心にぽっかりと空いた穴に吹く隙間風に見立て、「しのはらぶれど」で、相手にこれ以上気付かれずに恋心を抱き続けることの限界を表現している。

エ 「おののしのはら」で、風にそよぐ野の葉のように自分の胸中は常にさざめいていることを表現しており、「しのはら」の音を重ねることでの心のざわめきが表出しないように耐え忍んでいることを強調している。

問五 傍線部④「下敷きになっている」とあるが、和歌Ⅰと和歌Ⅱについての説明として、ふさわしくないものを次から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 和歌Ⅰは和歌Ⅱを元にしており、和歌の一部を変えることで、よみ手の秘めた恋心がより一層強く表現されている。
- イ 和歌Ⅰと和歌Ⅱはどちらも「しのはらしのぶ」と、「しの」の音を重ねることで、「忍ぶ」気持ちが強調されている。
- ウ 和歌Ⅰと和歌Ⅱは「浅茅生の小野」と置くことで実在する場所を連想させ、よみ手の孤独感をよりリアルなものにしている。
- エ 和歌Ⅰは和歌Ⅱを真似て作ったものであるが、和歌Ⅱの恋心のほうがより聞き手の心に強く訴えかけるものとなっている。









順天堂大学系属理数インター高等学校